

丘の上の母子寮

水俣市立母子寮を訪ねて



母が子を抱えて社会の荒波にもまれつつ働いている家庭——母子世帯は県下に16,238もある。10月下旬から全国的に展開される母子家庭を明るくする運動を前に、母子寮の素顔をここに紹介することにした。

草花の中に

水俣市の山の手ほど近い丘に水俣市立母子寮がある。今、十九世帯の母子家族がこの寮で生活している。母親たちは殆んど昼間は働きに出かけて、学校へ行かない幼児たちだけが保母さんと一緒に遊んで遊んでいる。中庭にはブランコや砂場などがあり、窓下の花壇には、秋の草花が一ぱい咲き乱れていた。

この寮の開設は、昭和二十六年でここ八年の間に二十一世帯の人たちが更生して果立っている。

母親たちの仕事は日稼ぎが多い。それに行商、和裁、看護婦、店員など。女手一つの生活は厳しすぎる。働いても、やはり足りないので生活扶助を受けている人がこの頃多くなつたということ。

温い協力の手

母子家庭に多い卑屈感や、無気力さというものが、やはりこの寮にも見受けられる。これは根強い一つの悩みであるらしい。だが、周囲の地域婦人会や青年団の人たちが、よくこの寮を訪ねて、舞踊や幻燈、紙芝居をやつて母子たちを喜ばしたり、又婦人会では他に茶話会を開い

て励し合つたり相談にのつたりしている。とうゆうことが寮の人たちのいぢけた気持ちを温くほぐしていつている。

寮母の船津さんはこのことについて、「周囲の人びとの援助の手が一番嬉しい」と力をこめて語られる。

今年の夏には、地域婦人会が寮の子供たちのために林間学校を開いた。一週間の日課が母子たちにとつて何よりも楽しい思い出となつていく。しかし又寮の人たちは「いつもみんなに助けられてすまない」という気持ちから、自分たちが計画して養老院や児童護施設へ人形劇をもつて訪問したりしている。

更生した人びと

更生して寮を出ていった人たちは、喜びと懐しさに満ちて、よく寮を訪ねてくる。

Aさんは戦争未亡人で女の子三人を抱えて開設当初から寮に住み込み日雇い夫で働きに出していた。長女の就職と同時に寮生活から立ちの生活に切替えたが今では母子の努力で完全に立直ることができた。

Bさんは、五年間寮の世話になつたが

ある食堂の女中頭として働いている中、信用と努力が実を結び子供二人と店に住込みながら子供の学校を終らさせた。今では子供も就職できて希望の日々を送っている。

AさんもBさんも寮を訪ねては里に帰つたようだとつい昔話に時間を忘れてしまふ。

今年の母の日はとても楽しかつたそうである。夕方早くから寮の子供たちは料理から接待まで一切自分たちで協力してやつた。母親たちへ花束が贈られ、母と子供たちは一緒になつてむつまじく歌つたり踊つたりして楽しい一夜をすごしたという。

母と子の窓

★

Fさんは今、片足がアキレスで不自由している。それでも日雇仕事に出かけている。Fさんにはいくお君という男の子がいて、仕事が終わった時は、急いで寮に帰る子供と一緒に遊ばれる。いくお君は小学二年生。今年の林間学校での作文に「ぼくのおかあさん」を書いた。その一部分をここに紹介することにした。

★ぼくのおかあさん

ぼくのおかあさんは、いつもたいさく(失業対策事業のこと)にいけます。かえるときのじかんは五じか四じです。そしておみやげをかつてきます。いつもにちようびは、きものをめつたりしてあそぶけれども、ぼくが、おかあさんが、かえりのおそいとき、ぼくはまちなんかので、まどをみますがだれもみえませんが、よそのおばさんたちがたうえしているのだけみえます。ぼくはしよんぼりして、ひとりであそんでいて、とがぎーつとあいておかあさんが、たぐいまといいます。ぼくはすぐ、てさげやぶるしきをもちますと、お



かあさんはありがとうといっています。そしておみやげをだしてぼくにくれました。あめがたくさんはいつていました。おかあさんにもわけてやりますが、おかあさんはそのときでもありがとうといっています。おかあさんは、よるはおそくまでお

母と子の窓はやゝもすると陽のあたためぬ日が多い。生活を切りぬいてゆくというところだけが精一ぱいで母親たちは途方にくれる。

そのために一番気を使うのが子供のしつけ。子供たちの保育や指導に当つている保母さんの仕事もムツかしい。やゝもすれば子供の指導が、片親のためおろそかになつたり偏愛におちいつてしまうこともある。子供の就職でも不利に扱われて泣きべそをかくこともある。だが母子たちは独り立ちの日を夢みて、きびしい日々に向つていく。そして、母子家庭に対する社会の温い思いやりと励しの心がつともつと望まれてくるのである。

(広報課)